スウェーデン・ヘリエー遺跡群出土の青銅製仏像と司教杖頭（角谷氏研究動向参照）

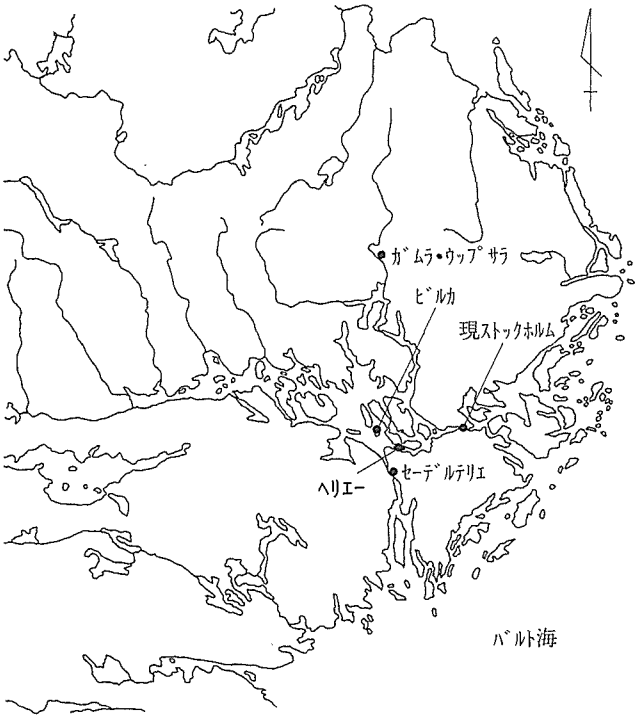
中世初期スウェーデン社会の一局面

——ヘリエーの遺跡群をめぐる諸問題——

角谷英則

はじめに

スウェーデンの首都ストックホルムの西に位置する、よく知られた鉄器時代後期[1]の遺跡に、現在はヘリエー Helgö と呼ばれている遺跡群がある。ヘリエーの遺跡群はリッルエーン Lillön[2]という、かつて海峡の真ん中に位置していた島（最大幅は東西で約四・七キロメートル、南北で一・二五キロメートル）の東部に集中してある。現首都ストックホルムも含まれるメーラレン地方全体にみられる、ヴァイキング時代にも進行しつつあった土地の隆起のために、現在ではリッルエーン島は北側のエーケルエー Ekerö 地区と陸続きになっている[3]。この島における豊富な出土品を伴う遺跡の存在が知られるようになった今世紀後半以降、ヘリエーはスカンディナヴィナの鉄器時代後期のある程度まとまった遺跡群のうち、ユラン半島南端に位置するヘーゼビュー Hedeby、ヘリエーの北西数キロのビョルケー Björkö 島西部にあるビルカ Birka と並ぶ注目を集めるようになっている。しかし、大陸側の史料とはいえ、同時代の年代記等に複数の言及があり、議論の余地のないほどの遺構、出土物が得られているビルカ、ヘーゼビューとは違って、ヘリエーの理解をめぐっては二六年にわたる発掘調査を終えた今も様々な議論がある。より正確には、時間がたつにつれて当然のことながら資料のより詳細な検討と研究者の世代交代が進み、その結果、当初は熱狂的な興奮をもって迎えられたと言ってもよいヘリエーの「発見」を冷静に見直せるようになってきた一九八〇年前後から、ほぼ定説となっていたヘリエー解釈の再検討が活発になってきている。これらのヘリエーに関わる議論の多くは中世初期スカンディナヴィア史の再構成に不可欠な



地図1　メーラレン地方

① スカンディナヴィアでは紀元前二〇〇年頃から紀元五五〇年頃までを鉄器時代前期、五五〇年頃から一〇五〇年頃までを鉄器時代後期というように時代区分がなされている。さらに鉄器時代前期はローマ期と民族移動期に分けられ、鉄器時代後期の前半は代表的遺跡のある地名にちなんでヴェンデル期、後半はヴィーキング（ヴァイキング）期と呼ばれている。

② スウェーデン語で「小さい島」の意。

③ ヴァイキング時代から現在までで約五メートル隆起している。

根本的な問題をいくつか含んでおり、その検討は当該時代の検討にあたって避けて通れないものとなっている。本稿ではヘリエーの発掘調査・研究史を辿りながら、背景にある問題を明らかにし、今後のヘリエー研究の方向を展望することを試みる。

一

現在まで確実な記録とともに保存されているヘリエーでの最も古い出土品は、一九四六年にヘリエーにある農場の所有者が見つけた2つの金で作られたスパイラル①である。しかし、このときはスウェーデンにおいてはそれほど珍しくない通常の散発的な出土と見なされたためか、立ち入った調査は行なわれなかった。その四年後の一九五〇年、農場の所有者が旗竿をたてるために穴を掘った際に出土した、コプト様式の青銅製の杓②（図1）が直接のヘリエー発掘の引き金となった。この青銅の杓が見つかった幅五〇センチメートル、深さ八〇センチメートルの穴は詳しく再調

査された。これがヘリエーでの最初の考古学的な調査である。杓は地表から二〇センチメートルほど掘ったところから見つかっており、それと同じ層の穴の側壁と掘り返された土には浅い銀製の皿の断片やガラス、陶器の破片が認められた。この周囲をさらに試掘したところ、深さ約三〇センチメートルまで土壌は炭で黒みがかっており、そこには焼かれた獣骨と粘土の破片が含まれていた。以上のような点から、コプト様式の柄杓などというスカンディナヴィア全体で見ても普通ではないものが見つかったものの、

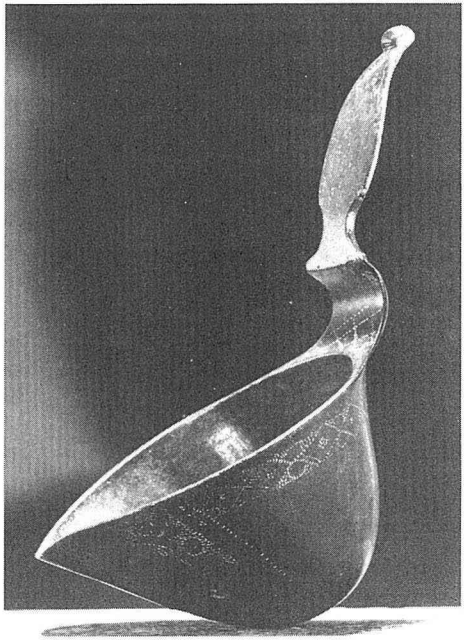


図１　発掘の引き金となった青銅製の杓

一九五〇年の発掘当時、この周辺は中世初期の居住地の残滓であると判断された。

本格的な発掘が開始されたのは一九五四年の五月で、それ以来、年三ヵ月の夏の発掘シーズンに、以後長くヘリエー研究に携わるヴィルヘルム・ホルムクヴィスト Wilhelm Holmqvist を中心として発掘調査が進められた。そして最初の発掘の開始直後から先史時代の遺構・遺物が多く見つかり、遺跡群の分布する範囲は最初に予想された以上の広さをもつことが確認される。この一帯は松、樺、その他の落葉樹で覆われており、その景観からはそこにかなりの規模を有する遺跡群があるとはまったく予想できない環境であった。したがって、狭い道が対角線状に通っていることを除けば、この区域は遺跡に重大なダメージを与えることが多い近代以降の人間の活動による破壊を幸運なことにまったくうけていなかった。一九五四年の発掘の成果を受けて一九五五年には五年がかりの発掘のための予算が認められ、部分的に国家による土地所有者からの地所購入もなされた。

発掘前の予想では建造物跡が残っているとは考えられていなかったのであるが、柱穴、礎石、炉床等の、建造物が一定期間、建っていたことを示すものが次々に出土し、複雑に折

り重なった、かなりの長期間（五〇〇年間から六〇〇年間）にわたって使われたとみられる建造物群、[3] そして試掘の段階から出ていた陶器・ガラス片、貨幣、武器・装飾品などの青銅・鉄製品、それらをここで製造したことを示す大量の鋳型の破片、鉱滓などが見つかった。なかでも衆目の関心を集めたのが青銅製で高さ八・四センチメートルの、蓮の上に座った六世紀頃の仏像（口絵写真左）と長さ一一センチメートル程の、青いガラスをはめ込まれて装飾を施された青銅製の、司教杖（同右）[4] の頭の部分である。

これらの成果は一九六一年に「ヘリエー発掘報告一九五四―一九五六年」[5] として出版された。[6] その中で発掘の指揮者かつこの報告書の編者であるヴィルヘルム・ホルムクヴィストはヘリエーの機能、役割、スカンディナヴィアの歴史においてヘリエーの占める位置について非常に包括的な説明を与えて見せた。そして歴史的な文脈の中にヘリエーを位置づけた、このホルムクヴィスト説は以後、今日まで定説として扱われることになった。

① 鉄器時代前期の最終段階にあたる民族移動期（四〇〇年頃から五五〇年頃）にみられる螺旋状のリング。

② 六世紀頃のもの。六～七世紀にオリエントから西ヨーロッパへ大量に運ばれた。

③ Building Group。ヘリエーでは建造物の遺構が数カ所に集まって群をなして出土する（地図2）。この時の発掘で出土したものは建造物群Ⅰ及びⅡと名付けられている。現在までで建造物群は八カ所まで確認されている。

④ アイルランドから持って来られたと見られている。

⑤ Holmqvist, Wilhelm (ed.), *Excavations at Helgö I : Report for 1954-1956*, Uppsala, 1961

⑥ このシリーズは現在も刊行が続いており、一九九四年には第一二巻が出された。一九八〇年代に入ってからはヘリエーに関わるモノグラフになっている。少なくとも更に三冊が公刊される予定である。Holmqvist, Wilhelm et al (eds.), *Excavations at Helgö II : Report for 1957-1959*, Uppsala, 1964 ; Holmqvist, Wilhelm (ed.), *Excavations at Helgö III : Report for 1960-1964*, Uppsala, 1970 ; Holmqvist, Wilhelm (ed.), *Excavations at Helgö IV : Workshop Part I*, Uppsala, 1972 ; Lamm, Kristina et al, *Excavations at Helgö V : 1 : Workshop Part II*, Stockholm, 1978 ; Hyenstrand, Åke, *Excavations at Helgö VI : The Mälaren Area*, Stockholm, 1981 ; Lundström, Agneta et al (eds.), *Excavations at Helgö VII : Glass-Iron-Clay*, Stockholm, 1981 ; Lamm, Kristina et al, *Excavations at Helgö VIII : The Ancient Monument*, Stockholm, 1982 ; Lamm, Kristina et al, *Excavations at Helgö IX : Finds, Features and Functions*, Stockholm, 1984 ; Hovén, Bengt E. et al, *Excavations at Helgö X : Coins, Iron and Gold*, Stockholm, 1986 ; Urne Miller, Karin Hedin, *Excavations at Helgö XI*, Stockholm, 1988 ; Clarke, Helen (ed.), *Excavations at Helgö XII : Wilhelm Holmqvist-the Helgö Scholar ; Building Groups 1, 4 and 5 ; Structures and Finds*, Stockholm, 1994

二

ホルムクヴィストが「ヘリエー発掘報告」第一巻の冒頭で展開している議論は多くの論点を含んでいるのであるが、そのヘリエーの解釈は次のような彼自身の言葉に集約されているといってよい。

「［ヘリエーで出土した多様な出土物の］すべては、後の時代のビルカと同じようにリッルエーン島が交易［trade］と手工業の中心地であったこと、まさにこの点において周囲の農業を営む地域に対して特別な位置を占めていたことを示している①」

「それには輸入された大量のガラス容器（そのうちの多くは六五〇年以前に遡る）、陶器、青銅器等を挙げれば十分であろう。これらのもの全てはヘリエーが早い時期に商業の中心、対外交易の中心地として成立したことの疑問の余地のない証左である②」

以下ではまずホルムクヴィストの提示した仮説に沿ってヘリエーをめぐる種々の問題について論点を押さえながら見ていくことにする。

ホルムクヴィストはまず、ヘリエーを拠点とした交易は多かれ少なかれ王的な権力によって集権的にコントロールされていたと主張する。その論拠とされたのはリンベルトの『アンスカール伝③』、この『アンスカール伝』自体をも参照して書かれたブレーメンのアダムの手になる『ハンブルク教会史④』にみられるビルカについての報告である。『アンスカール伝』はスカンディナヴィアへ最初のキリスト教伝道を行ったとされるアンスカールの事蹟録を八七五年ごろにリンベルト⑤が書き留めた聖人伝で、『ハンブルク教会史』はスカンディナヴィアをその管轄下に置いていたブレーメン大司教座による北欧への布教の歴史、北欧の地誌をアダムが一〇七〇年頃に綴ったものである。その内容から理解されるように、ここでも多くの文書史料と同様、キリスト教と教会をめぐる政治的状況の影響が一定程度みられるのだが⑥、この二つの史料はともにスカンディナヴィアへのキリスト教の布教を扱っており、実際に布教に携わった人間の情報をもとに書かれているだけあってその史料的価値は高い。そのうち、ホルムクヴィストの議論の土台となっているのは、具体的には以下の記述である。

・彼ら［伝道におもむいたアンスカール一行］はビルカと呼ばれているスヴェーア人の王国の港市（portus）へやってきた⑦。そこでビョルンという名のこの地の王に快く迎えられた。

それらの人々［洗礼を求める人々］にはこの町（vicus）の長（praefectus）であり、王の助言者でもあるヘルゲイルも含まれていた。[8]

・［王はアンスカールにビルカに留まり布教する許しを与え、人々が同意したが、王が言うには］彼は王国の別の部分にある［ビルカにある以外の］もう一つの民会で、そこへ集まった人々に是非を問わなければ完全に布教の許しを与えることができなかった。[9]

・すべてのおおやけの問題は王よりも人々の意思にしたがって決めるのが彼らの習慣であった。[10]

・ビルカはスヴェーア人が最も尊ぶ、彼らの神々の祭祀の場であるウップサラと呼ばれる聖地からそれ程遠くない、スヴェーアの地のただ中にあるヨータ人の町（oppidum）である。

・［この地に非常に多い海賊を防ぐために彼らは港に防御を施し、そのため］その入り江はスヴェーアの海域［メーラレン湖］では最も安全で、デーン人、ノルウェー人、スラブ人、センビ人、スキタイ人の船が様々な交易に必要なものを求めて集まってくる。[11]

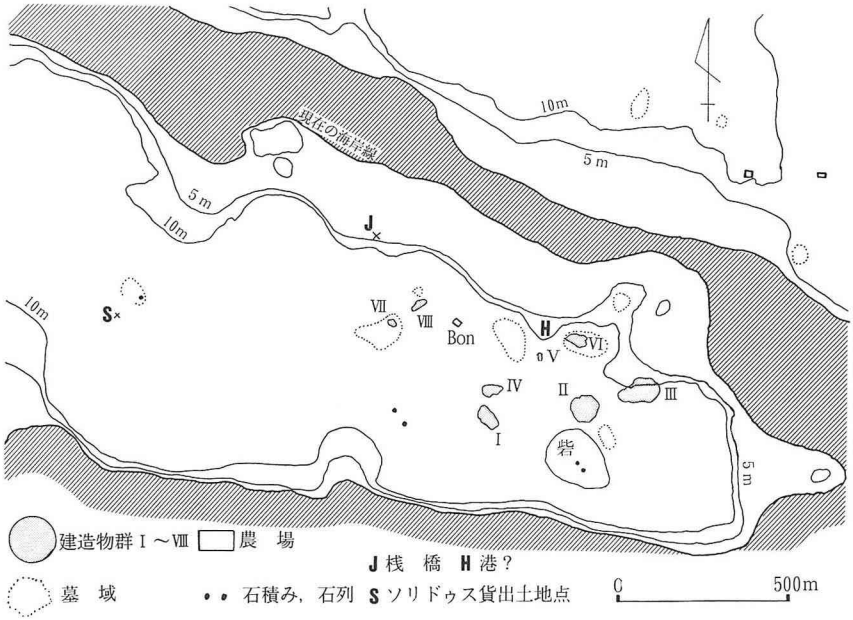
ビルカはヘリエーの北、数キロメートルのところに位置するビョルケー島上にあるヴァイキング時代の集落跡で、ここでの最初の発掘は記録に残っているだけでも一六八〇年代という早い時期に行われている。[12]上に挙げた史料や考古資料からは、ビルカがその実態は明らかでないものの、シング（民会）による規制を受けたスヴェーアの王的権力によって間接的に支配されていた、非農業的生業にその機能を特化させた都市的集落であったと考えられる。そしてホルムクヴィストはヘリエーから外来品や手工業生産物などの目立った出土が得られなくなる八世紀末頃からビルカの存在が確認されるようになること、すなわち時代的にヘリエーとビルカは近接していること、地理的にきわめて近いこと、この二点からヘリエーの性格はビルカのそれとほぼ同じであったと判断できるとしている。また仮にヘリエーを拠点としていた商業が権力によって組織化されていたとまでは言えないとしても、少なくとも王とその従者の利益をその目的としていたことに疑問の余地はないと考える。そして中世初期の西ヨーロッパにおける、存在が確認されている商業の拠点と比較してもヘリエーはかなり早い時期に商業の中心となっていたのであり、特にその傑出した出土品から見て遠隔地交易を担っていたらしいことも明らかである、と結論づける。たとえば、ヘリエーの出土品の中には七〇個以上のソリドゥス金貨があり、内四九個は発掘中に見つかっている。[13]

スカンディナヴィアで出土したソリドゥス貨の総数が九〇八個しかないことを考えるとこの出土の意味は小さくない。[14]

さらにホルムクヴィストはメーラレン地方に無数にあるルーン碑文（事績の記録や顕彰のためのもの）に登場する人名やその様式の研究にもとづいて、メーラレン地方が鉄器時代後期には水路による交通の便の良さも手伝い、ひとつのまとまりを持った地域であったのであり、[15] たとえばメーラレン地方の北部のガムラ（古）ウップサラ Gamla Uppsala[16] などに見られる大墳墓を築いた単一の権力の影響のもとにあったと考える。そうであるとすれば、時代が近く、一部は重なるビルカとヘリエーの間の関係を軽く見ることはできない。ちなみにヘリエーとビルカはそれぞれで出土したもっとも新しい貨幣の年代がそれぞれ一〇二五年、九六二年であることなどから、目立った出土は得られないものの、ビルカが商業拠点として機能していた間もヘリエーは完全に棄てられることなく人々の活動の場となっていたことが知られている。

またヘリエーは純粋にスカンディナヴィア人の手になる商業の拠点であって、ビルカにおいてそうであったように、例えばフリースラント人の北方との交易のためのコロニーであった、といった説明は成り立ちえないことが出土遺物・遺構の性格から論じられ、メーラレン地域がノルウェーに抜ける北の交易ルートとバルト海へ続く南のルートの間に位置するという地理的に見て適当な場所に位置することがヘリエーの築かれた大きな理由であったとされる。このようなヘリエーの遠隔地交易はバルト海東岸（現ラトヴィア）にあった同時代の集落グロービン Grobin[17] などとの連携のなかで行なわれたとみられ、それらの地域はヘリエーの手工業生産の「市場」でもあった。ヘリエーで生産されたものとの交換に使われたものとしては毛皮・鉄が考えられている。こうした商業の拡大にともなって手狭になったこと、ヘリエーからバルト海にぬけるルート上に位置するセーデルテリェ Södertälje の海峡が土地隆起のために使えなくなり、同時にヘリエーの船着き場自体も狭くなったことを理由としてヘリエーは交易拠点としては九世紀はじめに放棄された。そしてヘリエーで目立った出土がなくなる九世紀始めに成立したビルカがヘリエーの交易拠点としての役割を引き継ぎ、ヘリエーは国際商業拠点としての機能を失ったのである。

以上のようなホルムクヴィストによるヘリエーの位置付けは非常に総合的なのであるが、特に一九八〇年代に入ってからヘリエーの出土品・遺構の詳細な分析が進むにつれて全面的に批判を受けるようになってきており、現在のヘリエー研究者の議論は百家争鳴の状態にある。



地図２　リッルエーン島東部

① *Excavations I*, p. 23

② *Ibid.*, p. 34.

③ Waitz, G (ed.), *Vita Anskarii, Auctore Rimberto, Accedit Vita Rimberti*, Hannover, 1884, 1977 ; Odelman, Eva (ed.), *Boken om Ansgar, Rimbert : Ansgars ire*, Stockholm, 1986 ; W. Trillmich, R. Buchner (eds.), *Quellen des 9. und 11. Jahrhunderts zur Geschichte der hamburgishen Kirche und des Reiches*, Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters. Freiherr vom Stein-Gedächtnisausgabe, Bd. XI, Darmstadt, 1961

④ Adam of Bremen, (tr.) Francis J. Tschan, *History of the Archbishop of Hamburg-Bremen*, New York, 1959 ; Adam Bremensis, (hrsg.) Bernhard Schmeidler, *Gesta Hammburgensis Ecclesiae Pontificum*, Hannover, Leipzig, 1917 ; スウェーデン語からの重訳ではあるが日本語への部分訳もある。塚田秀雄「ブレーメンのアダム「北欧諸島誌」」『人文学論集（大阪府立大）』九・一〇合併号、一九九一、一五三～一六八頁、一一号、一九九三、五九～七四頁

⑤ アンスカール（八〇一～八六五年）に同行し、アンスカールの死後、そのあとを継いで大司教（八六五～八八八年）となった。

⑥ Hallencreutz, Carl F., *Adam Bremensis and Sueonia*, Uppsala, 1984

⑦ アンスカールが最初にビルカに赴いたのはリンペルトによれば八二九年である。

⑧ Waitz,G (ed.), *op. cit.*, p. 32 ; Odelman, Eva (ed.), *op. cit.*, s. 27f., Trillmich, W et al (eds.), *op. cit.*, S. 41-3 ; ..., tandem ad portum regni ipsorum, qui Birca dicitur, pervenerunt. Ubi benigne a rege eorum, qui Bern vocabatur, suscepti sunt... Inter quos etiam praefectus vici ipsius et consilarius regis admondum illi amabilis Herigar-

ius...

⑨ Waitz, G (ed.), *op. cit.*, p. 58f.; Odelman, Eva (ed.), *op. cit.*, s. 56; Trillmich, W et al (eds.), *op. cit.*, S. 93 ... sibique hoc per omnia placere, necdum tamen se plenam licentiam ei concedere posse, donec in alio placito, quod erat in altera parte regni sui futurum, id ipsum populis ibi positis nuntiaret.

⑩ Waitz, G (ed.), *op. cit.*, p. 57; Odelman, Eva (ed.), *op. cit.*, s. 54, Trillmich, W et al (eds.), *op. cit.*, S. 89; Sic quippe apud eos moris est, ut quodcumque negotium publicum magis in populi unanimi voluntate quam in regia constet potestate.

⑪ Adam of Bremen, (tr.) Francis J. Tschan, *op. cit.*, p. 51f.; Adam Bremensis, (hrsg.) Bernhard Schmeidler, *op. cit.*, S. 58; ... Birca est oppidum Gothorum in medio Suevoniae positum, non longe ab eo templo, quod celeberrimum Sueones habent in cultu deorum, Ubsola dicto... Ad quam stationem, quia tutissima est in maritimis Suevoniae regionibus, solent omnes Danorum vel Nortmannorum itemque Sclavorum ac Semborum naves allique Scithiae populi pro diversis commerciorum necessitatibus sollempniter convenire.; シャマイドゥラーの校訂本によれば八六五～九三五年の記事である。

⑫ 本格的な発掘は一九世紀末からはじめられ、最近まで断続的に続けられてきている。ビルカについては以下参照; Björn Ambrosiani, Bog Erikson, *Birka, Vikinga Staden, Volym, 1-4*, 1991-94; Ambrosiani, Björn, *Birka on the island of Björkö*, Uddevalla, 1991; Björn Ambrosiani, Helen Clarke, *Early Investigations and Future Plans, Birka Studies [1]*, Stockholm, 1992; Björn Ambrosiani, Helen Clarke (eds.), *Birka Studies [3], The Twelfth Viking Congress, Developments Around the Baltic and the North Sea in the Viking Age*, Stockholm, 1994; Arbman, Holger, *Birka I, Die Gräber*, Stockholm, 1940-43; Arwidsson, Greta (ed.), *Birka II:1, Systematische Analysen der Gräberfunde*, Stockholm, 1984; *Birka II:2*, 1986; *Birka II:3*, 1989; Gräslund, Anne-Sofie, *Birka IV, The Burial Customs, A study of the graves on Björkö*, Stockholm,1980; Wladyslaw Duczko, *Birka V, The Filigree and Granulation Work of the Viking Period*, Stockholm, 1985; 神田姿子「アーデルスエー島――ビルカの王の住むスヴェアの島――」『北欧史研究』一二、一九九五、三三～四六頁

⑬ 一般に発掘中に見つかった貨幣ほど出土状況などの付随的データがそろっているため資料的価値は高い。それに対し出土地、出土状況などが一切記録されていない埋蔵宝、貨幣には資料的価値はほとんどない。Kyhlberg, Ola, "Late Roman and Byzantine Solidi: An archaeological analysis of coins and hoards", *Excavations at Helgö X: Coins, Iron and Gold*, p. 13

⑭ 出土貨幣については以下参照。森本芳樹「西欧前期貨幣史の諸問題――一九六〇年以降ヨーロッパ学界の研究成果から――」『経済学研究』五六―五／六、一九九一、一八九～二二二頁; 拙稿「ヴァイキング時代の出土貨幣」『情報文化研究（名古屋大学）』二、一九九五、七三～八七頁。

⑮ *Excavations I*, p. 29

⑯ ウップサラ近郊にある墳墓・遺跡群。ヘリエーと時期的に重なる五世紀末から六世紀半ばに築かれた大墳墓が三基あり、その規模と副葬品から王を葬ったものと考えられている。

⑰ グローヒンについては、Nerman, Birger, *Grobin-Seeburg, Ausgrabungen und Funde*, Stockholm, 1958; Aleksander Loit, Ēvalds

Muguревičs, Andris Caune (hrsg.), *Die Kontakte zwischen Ostbaltikum und Skandinavien im frühen Mittelalter, Studia Baltica Stockholmiensia*, 9, Stockholm, 1992；熊野聰「ブレ・ヴィーキング時代のスウェーデン商業」『彦根論叢』一二九、一三〇、一九六八、九八～一一四頁

三

ここではヘリエーをホルムクヴィストとは違った角度から理解しようとしている主な学説とそれをめぐる議論を紹介したい。

(1) シュルベリ説

八カ所まで確認されている建造物群のうち、どの部分がどの時代に利用され、その使われ方はどのように推移していったのか、またそれらの建造物群はどのような性格を持っていたのかといった問題を考古資料から分析しているシュルベリ Kyhlberg らによれば、四世紀の末から始まった手工業的生産は目立った出土がなくなる八世紀末まで継続するものの、商品生産を目的とした大規模なものではなく、ヘリエーを非農業的生産に特化した集落の出現と言う意味において都市が形成されつつある過程にあるものとして見ることはできない。① ヘリエーでは多数の建造物跡が確認されてはいるものの、それらはかなり長期間にわたっている。したがって、そのうち同時期に並行して利用されていた建造物は意外に少数で、ヘリエーにはメーラレン地方で平均的な規模の農場が二つ以上あったことはないのである。また先に見たように、ホルムクヴィストは地理的時間的に非常に近いことを理由にヘリエーとビルカの機能上の連続性、性格の類似性を強調し、ビルカについての情報が得られる『アンスカール伝』をもとにヘリエーの性格、特に王権との関連を論じている。しかし、ホルムクヴィストが留意していない、あるいは無視したことで、ビルカとヘリエーの出土状況を比べた場合に著しい対照が明らかになる点がある。それはビルカには非常に豊富で多様な副葬品をもった多くの墓があり、さらにいくつかにわかれている墓域で出土する副葬品・埋葬習慣の傾向に一定の特徴が認められるのに対し、② ヘリエーの墓域は全く様相を異にしており、その墓域のありようからはビルカでみられるような社会的な階層化を推定することができないという点である。③ また、墓域、建造物群の規模から推定される、ヘリエーで同時期に生活していた人口は一六人から二四人に過ぎず、④ 約五〇〇～六〇〇人、⑤ あるいは約九〇〇人⑥と推計されているビルカとの差は大きい。この一六～二四人という人口は鉄器時代に利用されていたと思われる約七ヘクタールの土地が養いうる適度な数である。この面積は二～三の農場としてちょうどよい広さであ

り、[7]これは同一の時期に存在したと考えられる農場の数にも一致する。これらの点は同時代のメーラレン地域における他の農場のありかたとも適合的である。[8]しかし、墓域から推定される定住人口の少なさはヘリエーが季節的に利用されていた商業拠点であったことによる可能性もあり、この点を明らかにするためには、今後、メーラレン地方さらには北欧全域における、交換された物の製造・流通・消費の過程、商業に携わった人々の社会的な存在形態を明らかにし、この時代の商業のありようを具体的に再構成していく必要がある。

これらのことからヘリエーは都市的集落の形成という文脈で捉えられる、または王権や何らかの「中心」としての機能を有していたと考えられる場所ではなく、中世初期にみられた通常の農場として理解されるべきであり、その手工業生産は普通にそれぞれの農場でおこなわれていたものなのである。

(2) アレニウス説

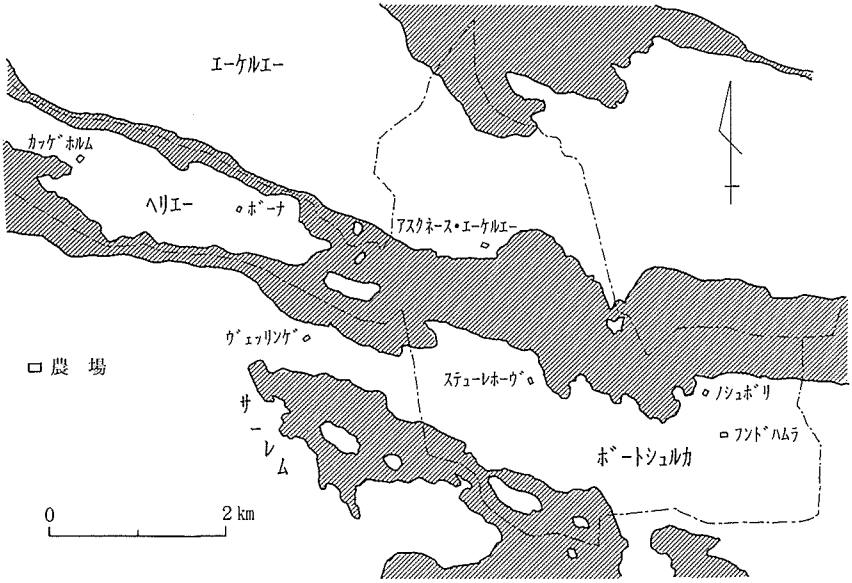
アレニウス Arrhenius はシュルベリの結論、すなわちヘリエーにはそれに見合う人口を有した最大二つの農場があったにすぎないということは認めつつも、ヘリエーは通常の農場がもつ以上の機能を担っていたと考える。[9]その一つはセーデルマンランド Södermanland とウップランド Uppland という二大州の境界領域という、ヘリエーのもつ地理的な条件に由来する防備施設としての役割である。リッルエーン島の属するエーケルエー教区はもともとセーデルマンランドのスヴァルトゥレーサ・フンダリ Svartlösa hundare に属していたのであるが、[10]一七世紀中にウップランドのフェーレントゥーナ・フンダリ Färentuna hundare に含まれるようになったことが知られており、したがってヘリエーは二大州のちょうど境界線上に位置していたのである。ウップランド、セーデルマンランドという地域的な単位が初めて史料に現われるのはかなり遅く一四世紀であるが、その存在は考古学上のモニュメントの様式・分布のありようからも確認され、かなり古いもの、すなわちヘリエーの時代にまで遡りうるものであるとみられている。

セーデルマンランドとウップランドには、特にメーラレン湖とそこに通じる水路沿いに、ある種の防備施設があったことが先史時代の多くの遺跡からわかっている。アレニウスはこの考えに沿って、建造物群Ⅱにある長さ二八メートル、幅五メートルで柱穴などの建築技術に特徴のある遺構を大型船の格納庫跡と解釈する。このような「船小屋」は他地域の遺跡からも知られており、それらから得られているデータによれば、アレニウスが格納庫跡とし

て取り上げている遺構は鉄器時代初期の型に妥当し、時代はヘリエーとも一致する。また、遺構の特徴から軍事的に重要であった馬小屋の存在も考えられている。

ヘリエーの遺跡群がこのような大型船の保管のための建造物を有する防備施設としての機能を持っていたとするならば、この施設がどのようなシステムの中にあったものなのかが問題となるが、アレニウスはそれをレイザング ledung（海軍役）の制度に求める。レイザングというのはスカンディナヴィア三国に共通して発達した軍事制度で、スウェーデンの場合、あらかじめ地理的に区分された沿岸地方の船区 skeppslag を単位として、農民は定められた基準に沿った船員の供出と艤装の義務を負っていた。レイザングの存在は上級権力の存在を意味しており、このシステムを前提としてヘリエーを解釈するならば、ヘリエーは王的権力によって組織されていた軍事上の拠点であり、軍船を保管するための場所でもあったと考えられるのである。しかし、レイザングの直接の史料となるのは一三世紀以降に記録された法典のみであり、この制度の存在が八世紀後半のヴァイキング時代初期というヘリエーの時代にまで遡りうるかどうかについては大きく議論が分かれている。[11] しかし、アレニウスはレイザングがヘリエーの時代にすでに機能していた制度であると考え、この軍事的な機能を基本に、州境での通行税の徴収や、北欧全域で普遍的な交換価値のあった手工業品の生産が行われていたのであり、ヘリエーでの夥しい出土物はそのような活動を反映している、というのがアレニウスの描くヘリエー像である。

アレニウスの見解は多くのヘリエー研究の中でも非常に個性的であり、そのためか批判も多い。たとえば、ランドスカップ Landskap（州）の境の変化は珍しくなく、ヘリエーに特別な位置を認められないこと、先史時代の砦・防備施設はウップランドとセーデルマンランドの全域に分布しており、必ずしも境界領域に集中しているとは言えないこと、またアレニウス自身も言及していることであるが、例えばウップランドという地域の呼称は一二九六年より遡ることができず、ヘリエーのような鉄器時代後期の早い時期の時代像を描くために用いるのは不適当なこと、[12] アレニウス説ではメーラレン地域の南と北で継続的に軍事的な緊張があったことが無条件に前提とされてしまっていること、建造物の利用のされ方の特定に無理があることなどである。[13] また、アレニウスがヘリエーの時代にまで遡りうると考えている、フンダリなどの地域的なまとまりが成立したのは一一世紀、すなわちヘリエーよりもかなり後の時代であるという研究者もあり、[14] この説を採るならばアレニウスの説明はまったく成り立たなくなる。



地図3　ヘリエー周辺の農場

(3) アンブロシアーニ説

この説においては、ヘリエーはガムラ・ウップサラにあった王権の直接の支配下に置かれていたというホルムクヴィストの主張が否定される。[15] それはガムラ・ウップサラを考えなくとも、ヘリエーの周辺には同時代の王的権力と関連づけられる場所がいくつかあるからであり、ボートシュルカ教区 Botkyrka のフンドハムラ Hundhamra がむしろヘリエーとの関係を想定すべき場所として挙げられている（地図3）。ヘリエーから東に数キロメートルの所、現在のノシュボリ Norsborg には二基の大墳墓を含む二二の墳墓がある。[16] 最大の墳墓からは六五〇年から七〇〇年頃の金銀で装飾された剣の一部が、ほかの墳墓からは五〇〇年から一〇〇〇年頃の副葬品が多く見つかっている。その出土品は、ヘリエーから最も豊富な出土がある時期でもある八世紀のメーラレン地域のものとしては傑出しており、この遺跡からは社会的な階層化を読みとることができる。[17] ボートシュルカの別の墓域の発掘からはフンドハムラの農場が六世紀末までには成立していたこと、八世紀が最も出土品の豊かな時代であることがわかっており、さらに文書史料からはこの農場が一三世紀には最も勢力のあったフォルクング Folkung 家に属していたことが知られている。[18] また、メーラレン湖南岸の、サーレム Salem 教区からボートシュルカ

にいたる地域のすべての農場がフンドハムラの勢力下にあったと思われ、サーレムの北岸から数百メートルのところに位置するヘリエーもその一つであったとみるのが自然というのがこの説のヘリエー理解である。そして、シュルベリによって示されたヘリエーの定住人口の少なさ、ビルカなどとは違って墓地の副葬品から社会的な階層化を認めることができないこと、鋳型や鉱滓などの手工業生産を示す遺物の膨大な出土があることを踏まえ、ヘリエーは王領地群の中で手工業品生産にその機能を特化させた農場であったとされる。つまり、基本的に一つの完結した生産と消費の単位であった農場が有する多くの機能を、その規模の拡大に応じて、主農場の近隣に置かれた農場に分散させることで分業をはかっていた王領地経済の仕組みの中において、特に手工業品の生産を担ったのがヘリエーであったと解釈されるのである。

また、アンブロシアーニは地名をその根拠の一つとしてあげる。この遺跡群は現在は便宜的にヘリエーと呼ばれているが、「ヘリエー（聖なる島）」という地名はビルカのある「ビョルケー」島同様、非常にありきたりなもので、史料上の同定には困難がともなう。そのために不確実さは残るが、「ヘリエー」という地名の初出は一二八三年にマグヌス一世がヘリエーで裁判を行ったという記録で、その後、一二八七年の抵当権設定のための文書、一三〇七年の相続に伴う文書がつづき、一三七〇年に「リッルエーン」が初めて現れる。[19] したがって、ヘリエーにはビルカにとっての『アンスカール伝』ような同時代史料がなく、本来の呼称は、直接には史料に伝えられていないのであるが、現在もヘリエーにある農場名「ボーナ Bona」が本来の形を伝えていると見られている。[20] この bo を含む地名は一般的なもので、広い地域にみられる。[21] アンブロシアーニはこの bo 系の名を持つ農場のメーラレン地方における分布が一船区 skeppslag に一カ所となっており、すなわち行政区との一致が見られることと、『エストイェータ Östgöta 法典』にある「特定の農場の管理人（代官）には他の者よりも高い人命金が払われること」といった内容の記述に着目する。具体的には「殺人に関する章」の第一四項に次のような規定が見える。[22]

> いま、ウップサラの bo の、王の管理人が殺されたとしよう。彼（の人命金）は四〇マルクに値し、それは王が受け取るべきである。これはヤールであるビルイェルによって法とされた。それ以前は一二マルクであった。
>
> いま、ローデン Roden の bo の、ヤールの管理人が殺されたとしよう。彼は九マルクに値し、それはヤールが受け取るべきである。

いま、司教の stafs bo ok stols[23] の管理人が殺されたとしよう。彼は九マルクに値し、それは司教が受け取るべきである。「特定の農場の管理人」とは「ウップサラ bo の王の管理人」「Stav と Stol bo の司教の管理人」「ローデン bo のヤールの管理人」であり、ここでは王国の上級役人である農場の管理人が bo 系の名を持つ農場、王の所領群の内の拠点にいたことが明らかである。したがってこれらの名を持つ農場は特別な地位にあったと考えられ、ヘリエーはその一つであったというのが彼の解釈である。アンブロシアーニのヘリエー理解は、ノシュボリの墳墓、フンドハムラとの関連づけという点においては説得的である。しかし、アレニウスらと同様、八世紀頃までを全盛とするかなりはやい時代に法典を史料として用いていることの問題が残る。

(4) カルマー説

カルマー Callmer の議論においても、ホルムクヴィスト説のいう、北欧における国際商業の中心地としてのヘリエーという考え方は誇張に過ぎるとして退けられる。[24] しかし、彼はヘリエーからの出土品のかなりの部分を占める手工業品生産の残滓にまず注目する。たとえば、金属製品の鋳造に使われた鋳型は非常に精巧にできており、これらが一定程度、規格化されていることが特に重要であると考える。ヘリエーでは青銅・金などの金属塊から製品の完成までのすべての工程が一貫して行われており、その技術的水準はかなり高い。したがって、その生産活動は一種の専門家によって担われていたと考えられるのである。そしてこれらのヘリエーで作られたものはメーラレン地域で広がりをもって出土しており、ヘリエーにはある程度、地域の拠点としての役割が認められる。しかし、その活動の性格は一面的であり、例えば、鋳造以外についてはこのような技術的高度さは認められず、また遺物の腐食による可能性もあるのだが、ヴァイキング時代にかなり広範な地域での様式の標準化がすすんでいた櫛の製造の痕跡が全く残っていないのである。[25] このようなことを考えあわせるならば、ヘリエーと同規模かつ同様の性格を有すると考えられる遺跡がこれまで未発見・未発掘ではあるが、バルト海沿岸に確認される可能性が高い。これがカルマーのイメージするヘリエー像の骨子であり、ヘリエーは周辺的な現象として捉えられる。

ここで問題となるのがこれらの「職人」的存在の社会的な位置である。手工業者の集団がヘリエーに定住し、継続的に生産活動を行っていたのか、いたとすればそれは社会的にどこに位置づけられる人々であるのか、あるいは各地を巡回して手工業生産を行う人々がいたのか。[26] たとえば、一定の経済圏内の定まった商業

ルート上を遍歴する職人がいたとするシュトイアーSteuerのような見方もあり[27]、この場合は自由な独立した職人像が背景にあるが、一般的には職人は上級の権力の影響下にあったと考えられている[28]。

この問題については、ラムクヴィストRamqvistのように当時の政治的な状況から考える研究者もいる[29]。ローマ鉄器期から民族移動期にかけて、スウェーデンでは一五の相互に独立した社会が存在したことが、生活様式、墓制、建築・陶器の型などからわかっている。民族移動期にはそれらの社会集団間の緊張が高まり、そのはっきりした現れとして大墳墓、砦、奢侈品が見られるようになる。そのプロセスの中で形成されてきたのが、ヘーゴムHögomやガムラ・ウップサラといった政治的な中心地である。それにともなって経済的、法的、宗教的な拠点もつくられていき、ヘリエーはその一つとして形成されたのである。逆に言うならば、これは政治的な状況という文脈から切り離してヘリエーを孤立的な現象として考えることはできないという見方である。小王権がヘリエーのような手工業的生産を特徴とする農場を維持した理由としては、社会的・イデオロギー的な機能、すなわち贈与・反対贈与に用いるためのもの、威信財としての手工業製品の生産が必要であったことが挙げられる。これは衣服につける装飾品や金のリング、剣の装飾品、ペンダントなどのヘリエーでの出土物を想起してみれば説得的である。これらのものが商業による利益を意図したものであるとしても、その背景となる社会に上のような社会関係の結び方を基本とする社会があったことは最近、特に強調されるようになってきており[30]、ヘリエーのような遺跡の社会的な機能を考える際には留意されるべき点である。

① Kyhlberg, Ola, "Chronological and topographical analysis of the cemeteries and settlements" in: Lamm, Kristina et al, *Excavations at Helgö VIII: The Ancient Monument*, Stockholm, 1982, pp. 13-36

② ビルカの墓域はビョルケー島全体にわたって、いくつかの集団に分散している。それらの個々の墓を分類する際には、土葬か火葬か、木棺墓か木槨墓か、副葬品の種類、性別、埋葬の方角、塚の有無など、多くの基準が考えられるが、そうした埋葬習慣はそれぞれの離れた墓地において一定の傾向をもって分布しており、そのことからビルカでは民族的・宗教的な出自の違いによってそれぞれ別の墓地に埋葬されたと考えられる。cf. Ambrosiani, Björn,*Birka*, p. 29

③ *Ibid.*

④ *Ibid.*, p. 27

⑤ Gräslund, Anne-Sofie, *op. cit.*, p. 77ff.

⑥ Björn Ambrosiani, Helen Clarke, *Towns in the Viking Age*, London, 1991, p. 157

⑦ Carlsson, Dan, Helgö -central place or farmstead?, in: Lundström, Agneta (ed.), *Thirteen Studies on Helgö*, Stockholm, 1988, p. 48

⑧ Kyhlberg, Ola, *op. cit.*, p. 27

⑨ Arrhenius, Birgit, "Continuity and discontinuity at Helgö", in: Lundström, Agneta (ed.), *op. cit.*, pp. 24-30

⑩ 九世紀頃から内陸部で形成された政治的・地域的集合体はフンダリ hundare, hund と呼ばれる。一一世紀始め頃、北メーラレン地方で更に大きなまとまりである三つのフォルクランド folkland が現れ（Tiundaland, Attundaland, Fjärdlundaland。それぞれ一〇 hund, 八 hund, 四 hundを意味する）、後にこの三フォルクランドがウップランドとなった。

⑪ Lund, Niels, "If the Vikings Knew a *Leding* - What Was It Like?, in: Björn Ambrosiani, Helen Clarke (eds.), *Birka Studies [3], The Twelfth Viking Congress, Developments Around the Baltic and the North Sea in the Viking Age*, Stockholm, 1994, pp. 100-105

⑫ Calissendorff, Karin, "Debatt: Helgö-unikt handelscentrum eller vanlig bondgård?", *Fornvännen*, 86-2, 1991, s. 108

⑬ Ramqvist, Per H., "Debatt: Helgö-unikt handelscentrum eller vanlig bondgård?", *Fornvännen*, 85-1, 1990, s. 58f.

⑭ Ambrosiani, Björn, "Settlement Structure in Viking Age Sweden", in: David M. Wilson, Marjorie L. Caygill (eds.), *Economic aspects of the Viking Age (British Museum Occasional Paper No 30)*, London, 1981, pp. 47-50

⑮ Ambrosiani, Björn, "Helgö or Bona on Helgö", in: Lundström, Agneta (ed.), *op. cit.*, pp. 14-19

⑯ *Riksantikvarieämbetet*（国立考古局）の遺跡案内板による。cf. Sandwall, Ann (red.), *Vendeltid*, Stockholm, 1980, s. 330f.

⑰ Ambrosiani, Björn, "Specialization and urbanization in the Mälaren valley-a question of maturity", *Acta Visbyensia*, 7, 1985, p. 107

⑱ *Ibid.* p. 108

⑲ *Excavations I*, p. 23f.

⑳ Lamm, Kristina, "The character and the function of the settlement", in: *Excavations at Helgö VIII*, p. 1; *bo* 系の農場名の方をより新しいと考える説もある。それによると中世後期の法典における *frid* は最古の法典における *helg* に対応しており、例えばスウェーデン中世の法典における *thingsfridher* は古アイスランドの *thinghelgi* にあたる。よって *Helgö* は特別な *frid*（平和）によって保護された場所と解釈され、これに従うならばシェルベリのような、くりエーはまったくの通常の農場にすぎないという理解は地名学の見地とは相容れないことになる。cf. Calissendorff, Karin, *op. cit.*, s.109

㉑ Pamp, Bengt, *Ortnamnen i Sverige*, Lund, 1974, s. 50ff.

㉒ D. Collin, D. Schlepter, *Corpus Iuris Sueo-Gotorum Antiqui*, Vol. II, *Codex Iuris Ostrogotici, Östgöta Lagen*, Stockholm, 1830, s. 59; Åke Holmback, Elias Wessén, *Svenska landskapslagar, Första serien: Östgötalagen och Upplandslagen*, Stockholm, 1933, s. 62

㉓ staf ok stolは「(司教の) 笏杖と（司教）座」を意味する。したがって、stafs bo ok stols とは司教が必要とする費用を賄うための、農場も含む財産を指していると考えられる。Hellström, Jan Arvid, *Biskop och landskapssamhälle i tidig svensk medeltid*, Rättshistoriskt Bibliotek, sextonde bandet, 1971, Stockholm, s.176-186

㉔ Callmer, Johan, "Some views on the Helgö excavations", in: Lundström, Agneta (ed.), *op. cit.*, pp. 31-37

㉕ この時代、櫛はすべての人が所有していたと言われるほど日常的なもので、民族移動期から副葬品自体が埋葬習慣の変化によってなくな

ってしまう時代まで、副葬されることがもっとも多かったものの一つであった。cf. Ambrosiani, Kristina, *Viking Age combs, comb making and comb makers in the light of finds from Birka and Ribe*, Stockholm Studies in Archaeology 2, 1981, Stockholm

㉖ シュルベリ説にしたがえば、ヘリエーは全く普通の農場であり、そこでの手工業生産も農民の生業の一部であったのであるからこれらの問いは全く意味をなさなくなる。

㉗ Steuer, Heiko, "Der Handel der Wikingerzeit zwischen Nord- und Westeuropa aufgrund archäologischer Zeugnisse", in : K. Düel, H. Jankuhn, H. Siems, D. Timpe (hrsg.), *Untersuchungen zu Handel und Verkehr der vor-und frühgeschichtlichen Zeit in Mittel-und Nordeuropa, Teil IV, Der Handel der Karolinger-und Wikingerzeit*, Göttingen, 1987, S. 186ff.

㉘ Ramqvist, Per H., *op. cit.*, s. 60 ; この点についてカルマーは判断を避けている。

㉙ *Ibid.*, s. 60ff.

㉚ Ross Samson (ed.),*Social Approaches to Viking Studies*, Glasgow, 1991

四

以上で見たように、ヘリエーをめぐる議論は多様で、お互いにまったく相容れない学説が林立している。その議論の焦点となっている点をまとめるならば、およそ以下の点に集約される。すなわち、当時のヘリエーにはどの程度の定住人口があったのか、すなわち墓域の性格、住居跡の機能はいかに理解されるか、手工業生産の水準は当時のメーラレン地方、スウェーデン全体の中でどの程度の規模をしめていたのか、市場での交換を目的とした生産（商品生産）が行なわれ、ヘリエーの機能は非農業生産に特化していたのか、ヘリエーにはどの程度の規模の農場・農地があり、定住人口に対する食糧供給はどのようにしてなされていたのか、つまり自給ができていたのかどうか、自給できていなかった場合、その補給は如何になされていたのか、社会内部における位置づけ、つまりウップランドなどの王権・上級権力との関連はどのようなものであったかといったことである。

それぞれの論点において史料の解釈やどの資料を重視するかということによって様々な議論が成り立ちうるが、これまでに出されてきたものの多くは二つに分けられる。[1] 一つはスウェーデンにおいて西欧的中世都市が形成されるにいたる最初の萌芽をヘリエーに見いだし、国際商業の中心地としていかにヘリエーが繁栄を享受したかを饒舌にかたるものである。このタイプのヘリエー叙述はホルムクヴィストによってその原型が作られ、彼の説に直接に批判が向けられるようになってからも、それに変わるヘリエー解釈の説明枠組みが固定していないため、現在、ヘリエー研究以外の場においては、たとえばヴァイキング時代の概説的歴史

叙述においてはほとんどそのまま用いられ続けている。[2] もう一つの議論のタイプはヘリエーから出土した遺構・遺物のそれぞれを分析の対象とし、研究の関心が過度に細分化したものである。このような専門研究の重要性に疑問の余地はないが、それぞれの研究（たとえば鋳型、建造物遺構に関する個別研究など）から得られた知見を前面に出してヘリエー像を描こうとすると歪みが生じてくるのは避けられない。また、モノグラフが増える一方でそれらを総合的に見直すという作業は容易でないこともあり、行われてきていない。したがって今後のヘリエー研究の方向としては、逆説的ではあるがホルムクヴィストが目指したような理解のしかたを再び志向していく必要があろう。そのためには、中世初期メーラレン地域において、経済的・社会的にヘリエーが占めていた位置を具体的に明らかにすることが特に重要であり、その際には法典史料について、その史料的価値の有無自体から再検討すること、さらに近年、中世北欧史研究に取り入れられつつある歴史人類学的な視点からの研究が鍵となるであろう。[3]

もっとも、すでに豊富な出土物が得られているとはいえ、ヘリエーでこれまでに完全な発掘が行われたのは建造物群Ⅱだけであり、建造物群Ⅰは半分のみ、その他の建造物群は部分的に調査されているに過ぎない。墓域にいたっては、それぞれ二十基以上のある墓のうち一基が試掘されているだけで（地図2）、さらなる発掘が待たれている。[4]

しかし、研究史を概観するならば、最近、ヘリエーを見直そうという議論が出てきたことにより、研究状況は着実に進歩しつつあるように思われる。また、ホルムクヴィストらが「国際商業の中心地としてのヘリエー」という仮説を建てるに急に過ぎた、その背景にも目が向けられるようになってきている。たとえば初期の発掘に携わったラムは次のように書いている。

……そこからは坩堝や鋳型の破片がはっきりと湧き出ていた。私たちはそのような、本当の金の山をもっと調べないでほおって置くなんてことはとてもできなかった。二週間、私たちはすすを含んで黒くなった腐植土で見分けがつかないほど汚れてそこに［発掘のために］寝そべっていた。それでも幸せだった。……それは熱病におかされているようなものであり、あるいは正気な人が見たら私たちは狂ってしまっていると思ったであろう。[5]

このような熱狂が当時の研究者をとらえていたことを念頭に置くならば、たしかに国際色豊かな遠隔地交易を想定させる様々な出土品はそれ以外の結論を不可能なものとして思い込む根拠としては十分であったろうし、特に彼らも大いに驚いたであろう仏像

や司教杖、コプト様式の勺などが最初の発掘でみつかった、あるいはみつかってしまったことがその確信をより強固なものにしたであろうことは想像に難くない。また、今世紀の前半からアルブマンらによって発掘され、一九三〇年代にすでに報告書が公刊されていたビルカの前身にあたる遺跡がスウェーデンの国内にあるはずである、あるいは見つかって欲しいという雰囲気が当時の歴史・考古研究者の間にあり、その影響を強く受けていたことも明らかであろう。このような意識をホルムクヴィストが強く持っていたことは、彼が西ヨーロッパの中世初期商業集落と比較したときのけた違いなヘリエーの年代的な早さを驚きをもって語り、ヘリエーが純粋に「スカンディナヴィア人」「スウェーデン人」によって担われたことを強調しているところから読みとることができる。しかし、そのような初期の研究者の意識にあった強いナショナリスティックな感情、西欧からは独立した、都市の発展過程を現代のスウェーデンという国家の「国境内」で段階的にあとづけることができるはず、できて欲しいという思いの存在が、おそらく当時と同様に現在でも自覚化されていないことは指摘に値するであろう。⑥ したがって、そのような感情は、ヘリエー研究に限らないことであるが、今後もスウェーデン人研究者の問題意識の中に自覚化されないままに潜み続け、その研究のなかに形を変えて現れてくると思われ、このことも常に留意されなければならない問題の一つである。

① Ramqvist, Per H., *op. cit.*, s. 58

② Burenhult, Göran, *Arkeologi i Sverige*, 1991, Stockholm, etc.

③ Ross Samson (ed.),*op. cit.*; Gísli Pálsson (ed.), *From Sagas to Society: comparative approaches to early Iceland*, 1992 etc.

④ 発掘方法が多分野の専門家の協力に基づいた緻密なものとなった現在では、発掘計画の立案そのものに多大な労力と工夫が必要とされ、そのため一度しか行えない、遺跡破壊でもある発掘はかつてほど容易には行えなくなっている。また発掘・分析の機械化・大規模化によって膨らんだ、数百万クローネ（数千万円）かかるといわれる費用も発掘を事実上不可能にしている。

⑤ Lamm, K, "Svensk konstindustri för 1500 år sedan", in: Holmqvist, Wilhelm (red.), *Helgö: den gåtfulla ön*, Uddevalla, 1969, s. 113

⑥ たとえば、Bergström, Eva, "Early Iron Age", *Current Swedish Archaeology*, Vol. 3, 1995, pp. 55-66

〔写真・挿図出典〕

口絵写真・図1　Holmqvist, Wilhelm (red.), *Helgö: den gåtfulla ön*, 1969

地図2　*Excavations at Helgö, VIII*, 1982

地図3　Ambrosiani, Björn, "Specialization", *Acta Visbyensia*, 1985

（名古屋大学大学院博士後期課程　　）